



平成二十五年度文化庁文化芸術振興費補助金  
(トップレベルの舞台芸術創造事業)

平成二十六年

三月

# 自主公演能

とき

平成二十六年三月二十三日(日)正午始

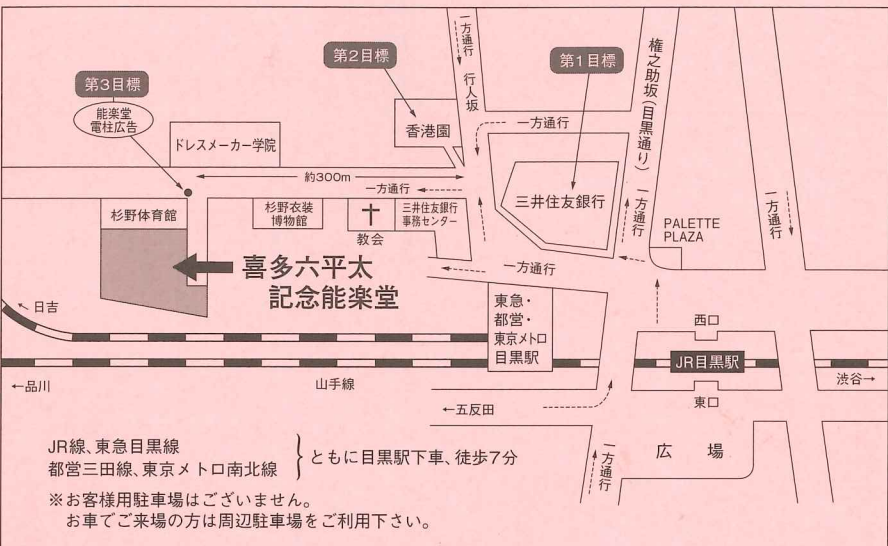
〈整理券配布・十時三十分、

見所入場・十一時、解説・十一時十五分〉

ところ

十四世喜多平太記念能楽堂

## 【会場案内図】



主催 **喜多流職分会**

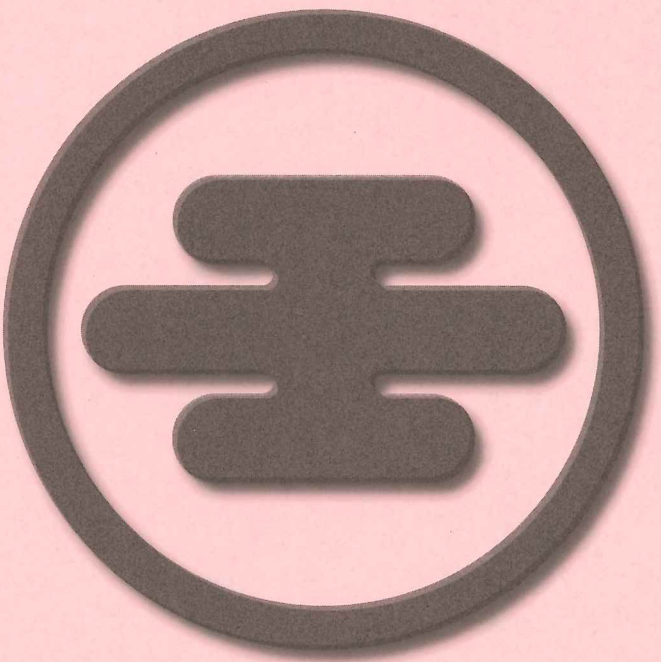
後援 公益財団法人 十四世六平太記念財団

〒141-0021

東京都品川区上大崎四一六一九

十四世喜多平太記念能楽堂

電話 (〇三)三四九一八八一三  
ファックス (〇三)三四九一八九九九



**喜多流職分会**

# 《チケットのご案内》

三月チケット発売開始日

平成二十六年二月二十三日(日) 午前十時より

## 年間優待券

- 十一枚綴り 五〇、〇〇〇円
- 五枚綴り 二五、〇〇〇円

優待券は各職分でも受付をしております。

## 前売券

- 一般券 六、〇〇〇円
- 学生券 二、五〇〇円
- 学生団体(二〇名以上) 二、〇〇〇円

指定席料 二、五〇〇円

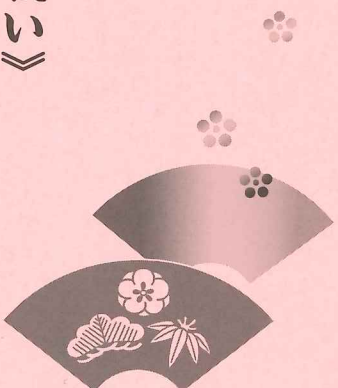
## 当日券

- 一般券 六、〇〇〇円
- 学生券 二、五〇〇円

## 《お取扱い》

窓口とお電話にて承っております。

( FAX 及びメールでのお申し込みは  
お受けしておりません。 )



## 十四世喜多六平太記念能楽堂事務局

《電話》〇三―三四九一―八八二三

(午前十時〜午後六時)

佐藤 隆

## 平成二十六年 五月自主公演能予告

平成二十六年五月二十五日(日) 正午始  
十四世喜多六平太記念能楽堂

- 「忠 度」 佐々木多門
- 「源氏供養」 佐藤章雄
- 「鍾 馗」 粟谷能夫

五月チケット発売開始日  
平成二十六年三月二十三日(日)  
午前十時より

### 【ご注意】

- \*喜多流職分会の許可なき写真・ビデオ撮影、及び録音はできません。また演能の妨げや他のお客様の迷惑になる行為もご遠慮ください。時計のアラームや携帯電話の電源は必ずお切りください。なお、迷惑行為を発見した場合や係員の指示に従っていない場合は退場していただく事もございます。
- \*2階ラウンジ以外でのご飲食は固くお断り致します。
- \*自主公演当日は午前10時30分より「整理券」(お一人様一枚)をお配りし、午前11時より整理券番号順に見所へ入場していただきます。
- \*チケットは入場前に半券を切り離すと無効になります。
- \*座席はお一人様一席です。入場の際手荷物等でお連れ様の座席を取り置く行為は固くお断り致します。
- \*公演日によっては、満席になり次第入場をお断りすることもございますので、あしからずご了承ください。
- \*公演中止の場合を除き、お申込後のチケットの払い戻し、変更、再発行はいたしません。
- \*やむを得ない都合により出演者が変更になる場合がございます。
- \*全館禁煙でございます。屋外喫煙所をご利用ください。
- \*お客様用駐車場はございません。お車でご来場の方は周辺駐車場をご利用ください。
- \*貴重品の管理には十分ご注意ください。館内で起きました盗難・紛失につきましては一切責任を負いかねます。

# 三月自主公演番組

●平成二十六年三月二十三日(日) 正午始  
●整理券配布・十時三十分、見所入場・十一時  
解説・十一時十五分

能

後シテ・坂上田村磨の靈  
前シテ・童子

谷 大作

## 田村

ワキ・旅僧 福王知登

アイ・清水寺門前の者 前田晃一

大鼓 柿原光博  
小鼓 田邊恭資

笛 内瀉慶三

後見

栗谷幸雄  
内田安信

地謡

佐藤寛泰 佐藤章雄  
友枝雄人 栗谷明生  
松井 彬 出雲康雅  
栗谷浩之 中村邦生

狂言

## 長光

シテ・すっぱ 三宅右矩

アド・田舎者 高澤祐介  
小アド・目代 三宅近成

休憩 二十分

能

子方・桜子 友枝大風

後シテ・前同人  
前シテ・桜子の母

友枝昭世

## 桜川

ワキ・磯部寺の住僧 福王和幸

ワキツレ・里人 喜多雅人

ワキツレ・従僧 村瀬 提

ワキツレ・従僧 村瀬 慧

大鼓 柿原崇志  
小鼓 曾和正博

笛 一噌仙幸

後見

高林白牛口二  
大島政允

地謡

佐藤 陽 笠井 陸  
大島輝久 栗谷能夫  
高林伸二 香川靖嗣  
佐藤寛泰 大村 定

休憩 十分

仕舞

佐藤 陽

嵐山

友枝真也

地謡

大島輝久  
佐々木多門  
塩津圭介

能

後シテ・光源氏の霊  
前シテ・樵翁

狩野了一

ワキツレ・友頼従者 矢野昌平

須磨源氏

ワキ・藤原友頼 江崎敬三

ワキツレ・友頼従者 喜多雅人

大鼓 安福光雄 太鼓 大川典良  
小鼓 観世新九郎 笛 一噌隆之

アイ・浦人 三宅近成

後見

塩津哲生  
金子匡一

地謡

佐藤 陽 粟谷充雄  
友枝真也 金子敬一郎  
佐々木多門 長島 茂  
塩津圭介 内田成信

附祝言

(終了予定五時頃)

《田村(たむら)》

旅の僧が京都の清水寺に着き、爛漫と咲いている桜の花を眺めていると、桜の木の下を清めている童子がいるので、この清水寺の縁起や名所を尋ねる。するとこの寺は坂上田村麿を檀那と頼んで建立されたと話し、旅僧と一緒に月に榮える桜の下で夜の風情を楽しむ。僧が童子に名を尋ねると童子は田村堂に消えてしまう。  
《中人》僧が夜もすがら経を讀んでいると、夜半に武将姿の坂上田村麿の霊が現れ、勅命で鈴鹿山の賊の討伐に出向いたとき、清水寺に祈願して出陣し千手観音の助勢を受けて賊を滅ぼすことが出来たという話を物語る。

《長光(ながみつ)》

坂東方からやってきた田舎者が、預かった「長光」の名刀を携え、都に向かう途中、大津松本の市場を見物する。それを格好の標的とばかりに目を付けた「すっぱ」が、田舎者の太刀の紐を腰に結わえ付けて自分の物と言い

張り、争いとなる。そこへ目代が仲裁に入り、太刀の持ち主を裁定しようとして、田舎者から国作、地肌、焼きなどの様子を尋ねるが、聞き耳を立てていたすっぱも同じことを言う。そこで最後に寸法を尋ねると、田舎者は目代にこっそり耳打ちをして伝えるので、案の定すっぱは答えに窮して、その正体を現すのだった。

《桜川(さくらがわ)》

九州日向国、桜の馬場に住む桜子は、家の貧困を救うために自分自身を人商人に身売りする。人商人からその代金と手紙を受けた母は、悲嘆にくれ悲しみのあまりに狂気となり、我が子の行方を訪ねるために旅に出る。《中人》常陸の国磯部寺の桜川では、ちょうど花が満開で見頃であった。その頃桜子は磯部寺の従侶に師弟の契約をしており、師僧に伴われてこの桜川にやってくる。そこにいた茶屋の主人は、桜川を流れる花を掬って舞い狂う女がいるので、稚児に見せることを僧に勧める。呼び出され

た狂女は、日向国から我が子を訪ねて来たことや、我が子の桜子の名前由来を語り、桜川に流れる花を掬って舞い狂う。僧は、この狂女が桜子の母であると悟り、母と子を再会させ、母と子は連れ立って故郷へ帰って行くのであった。

《須磨源氏(すまげんじ)》

日向の国宮崎の神官である藤原興範は、伊勢神宮の参詣途中で須磨の浦にいる樵翁に出会う。樵翁は光源氏の旧跡にある若木の桜を眺めている。藤原興範が光源氏について尋ねると、源氏の生涯を語り始め、自分は『源氏物語』の主人公の光源氏であると明かして消える。《中人》旅寝する藤原興範の前に在りし日の美しい気高い姿の光源氏が現れ、青海波の遊樂に引かれて舞うと、今は兜率天に住むが須磨はもとの住処であり、自分は衆生を助けるために天下つたのであると告げ、明け初めた春の空に姿を消して行った。